

論文の内容の要旨

論文題目 パブリックハウジングにおける住民間相互作用を
意識した共用廊下の使いこなし方に関する研究

氏 名 久保田 愛

<研究の目的>

本論文は、大規模な外部廊下型集合住宅の事例の中で、植木鉢や洗濯物のようなあふれ出し¹を観察し、その空間分布に着目して統計分析を行うことを通して、住民達による自発的な場所の使いこなし方の実態を明らかにするものである。そして、その実態から推察できる知見を、今後の集合住宅の計画・設計・管理に役立たせることを目的とする。

共用部に置かれたあふれ出しの中には、植栽や洗濯物のように、その場での住民の活動を伴い、住民同士のコミュニケーションの機会を創出してくれるものがある。さらに、本論文が明らかにするように、あふれ出しは、それ自身が相互作用でもある。住民達は、自分だけの場所でない公共部や共用部にもものを置く以上、その場所にもものを置いていいかどうか、ある程度周りの様子を伺って決めている。これは、住民同士の相互作用の一つである。これらのことから、共用廊下にあふれ出しが広がることは、住民同士のコミュニケーションが広がることにつながると考えられるが、多くの集合住宅では、共用部にあふれ出しを置く行為は禁止されている。

本論文では、あふれ出しが多く見られる韓国のパブリックハウジングである江南 A3 の事例から、①-1 あふれ出しが相互作用であるということを示し①-2 その相互作用の性質を検証する②-1 どのような空間であふれ出しが多く誘発されるのか、②-2 広がったあふれ出しがどのような場を作り出しているか、を検証し、共用廊下に広がるあふれ出しの実態を捉える。そして、得られる知見に基づき、共用廊下の良い使いこなし方につながる空間のあり方を提案する。

¹ 本研究では既往研究で見られる表出・あふれ出しの区別は行わず、共用部に置かれているものは全てあふれ出しとして扱う。

<調査対象>

実際に確認できるあふれ出しを通して、そこに働く住民間相互作用の確認及びあふれ出しを誘発する空間的条件を検証するために、1.統計分析を行うに十分な規模があること、2.住戸前の空間的条件が多様でありながらも、その多様さに限りがあること、3.十分な戸数が並ぶ廊下式集合住宅であること、という条件を満たす、韓国のパブリックハウジングである江南 A3 を調査対象とし、低層部の2~4階（一部5階）部分にある354住戸に面する共用廊下でのあふれ出しをプロットとした。この集合住宅の廊下は外部式片廊下であり、住戸側と、中庭側それぞれにアルコーブとバルコニーが設置されていることが特徴である。得られたプロット図を住戸前ごとに、①住戸前に拡がるあふれ出し領域の位置②住戸前に置かれているあふれ出しアイテムの種類③住戸の玄関ドアの開閉、に着目してデータ化した。

<住民間相互作用の分析>

まず、あふれ出しが相互作用であるということを示した上で、その相互作用の性質を検証する。近接する住戸間の住民同士に働き、互いのあふれ出しを協調させる力、を住民間相互作用とこの住民間相互作用を観察する手段としてあふれ出しの凝集性に着目することを提案する。あふれ出しは、共用廊下内に空間分布を持って拡がる。また、必ずしも全ての住民があふれ出しを廊下に置きたがっているわけではないので、ある確率をもって出現する。そのため、相互作用によって誘発し合っただけで置かれた場合、ランダムに置かれた場合と異なり、あふれ出しが凝集するはずである。

このあふれ出しの凝集性を詳細に調べるために、ある住戸のあふれ出しが近接する住戸のそれとどの程度相関を持っているか、近接する住戸間で住戸間相関係数・住戸間自己相関係数を計算する。住戸間相関・住戸間自己相関が強ければそれだけあふれ出しの有無がそろっているということとなり凝集性が高いことになる。

各住戸前の領域（中庭バルコニー側・中央通路部・住戸アルコーブ側）ごとのあふれ出しの有無及びあふれ出しの種類について、近接するとみなす範囲を1軒隣から廊下全体まで増やしながら住戸間相関係数を計算していく。

その結果、①各住戸前におけるあふれ出しは、1軒隣の範囲において最も高い凝集性が確認でき、2軒隣、3軒隣と範囲を広げるに従って、凝集性は低くなること②住戸前領域別にみると、廊下内中央の通路部分においてあふれ出しは最も高い凝集性を持っていること、が分かった。また、③自転車類に関しては住戸間自己相関も他のあふれ出しとの住戸間相関も確認できない④装飾品、目隠し、食品・壺及び洗濯物において植栽・園芸用品より強い住戸間自己相関が確認できる⑤廊下を住戸の延長のように利用するという行為に住民間相互作用が働く、などの相関関係が見られた。このことから、江南 A3 においては住戸同士の近接性に基づく種々の住民間相互作用が働いていることが推察される。また、今回の分析からは、既往研究において「表出」と呼ばれ、近隣関係を作り上げる上で好ましいとされている装飾や植栽よりも、洗濯物や食品などのような住民の日常生活に関わるものの方

が住民間相互作用が働きやすいことが分かった。

<空間的条件の分析>

次に、あふれ出しを誘発する空間的条件がどのようなものか検証するために、江南 A3 において比較できる空間的条件である、i)廊下が面している方角 ii)他住戸への通り抜けがあるか iii)廊下前に別の住棟があるかどうか iv)アルコーブがあるか v)バルコニーがあるか vi)住戸の間口が1スパンか2スパンか、の5項目について、あふれ出しの有無やその空間分布パターン、との関係をドアの開閉との関係も含めて決定木や偏相関係数を用いて検証した。また、各分布パターンをドアの開閉や置かれているあふれ出しの種類との関係をみることから、分布パターンごとのあふれ出しの性質の差を考察した。この分析から、以下に代表される知見が得られる。①南面廊下の方があふれ出しが多い。②住戸への通り抜けが無い箇所においてあふれ出しは起こりやすいが、他住戸への通り抜けがある場所でも、通路以外の余剰領域が存在すればあふれ出しは起こりやすくなる。③アルコーブが設置されている住戸前ではバルコニー内やバルコニー側でのあふれ出しは起こりにくい。一方、バルコニーが設置されている住戸前において、アルコーブ側でのあふれ出しが起こりにくくなるということはない。④あふれ出しがバルコニー側・住戸側ともに広がる分布パターンは、住戸のドアが開放されがちであり、また他住戸への通り抜けが無い箇所及び、バルコニー・アルコーブのような余剰領域がある箇所でおこりやすい。⑤北面廊下にアルコーブを設けると共用廊下とドアが開放されにくくなり廊下と住戸の連続性が低い使われ方となる。

<まとめ>

以上の分析から得られた知見をまとめると、以下のようになる。

●あふれ出しの相互作用に関する知見

- ・ あふれ出しには相互作用を表すものがある。
- ・ 距離が近い住戸間の方が、あふれ出しを通して互いの振る舞いを気にしている。
- ・ 置いていいか判断が微妙な場所やモノにほど相互作用が表れる。

●あふれ出しを誘発する空間的条件に関する知見

- ・ 陽当たりがよい方が使われやすい。
- ・ 他住民の通行の邪魔になりにくい場所である方が使われやすい。
- ・ アルコーブのように専有性の高い共用部は不要なものを置いているだけの使い方になってしまう可能性がある。
- ・ 誰が占有するか明確ではないバルコニーのような空間があると、日常的に利用するものをあふれ出しとして置くようになる。

<共用廊下の良い使いこなし方を誘発する提案>

本論文が考える共用廊下の良い使いこなし方とは、良いあふれ出しが広がっている状態のことである。そして、良いあふれ出しとは、コミュニケーションの一つとなるもの、コ

コミュニケーションの機会を作るものだと考える。この良いあふれ出しを通して住民達が地域コミュニティを形成することが期待できるような共用廊下の使いこなし方を誘発したい。

コミュニケーションの一つとなるあふれ出しとは、すなわち本論文が定義した住民間相互作用が働くあふれ出しである。本論文から得られた知見ではそれは、洗濯物や壺のように置いて良いか判断が分かれるようなあふれ出しであり、また、通路部分におかれたあふれ出しのように、置いて良いか判断が分かれる場所に置かれたあふれ出しであった。

コミュニケーションの機会を作るあふれ出しとは、廊下での住民の活動を呼ぶあふれ出しである。洗濯物や植栽のように日常的な活動を伴うもの、さらにはドアが開放される状況を作り出すような、廊下と住戸との連続性を高める、住戸前の廊下全体に拡がったあふれ出しである。この住民の活動を呼ぶあふれ出しは、「廊下を住戸の延長のように利用するという行為に住民間相互作用が働く」という知見を踏まえると、同時に住民間相互作用が働いているあふれ出しでもあり、とても良いあふれ出しだと考えられる。

以上のことから、集合住宅の共用廊下に良い使いこなし方を誘発するための提案として、次のことが挙げられる。

<共用廊下の良い使いこなし方を誘発する提案>

- ① 廊下が陽当たりのよい外部空間であること。
- ② 廊下に通行の邪魔になりにくい余剰のスペースだと認識できる場所があること。
- ③ どの住戸前にも余剰スペースがあること。
- ④ その余剰のスペースが、自分が専有して良い場所なのか否か判断がつきにくいこと。

また、廊下の管理指針として、以下の点に配慮すると良いと考えられる。

- ⑤ 植栽のように好ましい印象を与えるものでなくても、住民達独自のルールで許容されていると考えられる日常生活にまつわるものを一意的に排除しないこと。

金銭的弱者や身寄りのない人も住んでいるパブリックハウジングにおいては、その廊下を住民達に自由にそして気持ちよく使いこなしてもらうことは、彼らの生活を僅かかもしれないが豊かにしてくれるはずである。今後、都市生活の一翼を担うパブリックハウジングを企画、設計、管理していくための指標として、以上のような共用廊下における良い使いこなし方を誘発する提案及び、更なるデザイン検討事項を示すことで、本論文の結びとする。